

ブータン諸語の記述・歴史言語学的研究の現状

西田 文 信

Status quo of descriptive and historical linguistic studies on Bhutanese languages

Fuminobu NISHIDA

1. はじめに

ブータン王国には、未だ研究が十分に進んでいない民族言語が多数存在する。ブータン諸語の大部分はシナ=チベット語族チベット=ビルマ語派に属する。ブータン王国中部で話されている所謂ブムタン・グループの諸言語や東部で話されている諸言語はそれぞれ音韻上及び形態上の共通特徴を有しているが、それらがチベット=ビルマ語派の古い様相を残すものではないかとの見方もあり、言語学的に非常に興味深いものである。

本稿では、ブータン王国で話されているチベット=ビルマ語派の諸言語の記述（音韻・形態・統語）、歴史（主に音韻変化）の解明を目的とした諸研究を概観する。先ず、シナ=チベット語族及びチベット=ビルマ語派の研究史を略述する。

2. シナ=チベット諸語研究史

従前、シナ=チベット語族の基本的なレファレンスとしては Robert Shafer の *Introduction to Sino-Tibetan* (Wiesbaden: Otto Harrassowitz 1966-73年・合本1974年) と Paul K. Benedict の *Sino-Tibetan: a conspectus* (New York: Cambridge University Press, 1972年) が用いられてきた。この二冊は、主に史的考察を主眼としており依拠したデータが時代的な制約もあり、精密さに欠け、分析の深さ・厳密さにも問題があったためこれらにかわる、漢語派 (Sinitic) とチベット=ビルマ語派 (Tibeto-Burman) 両者をバランスよく扱った書物の刊行が久しく待ち望まれていた。また周知の如く、漢語派に関しては夥しい数の研究書が表れてはいるが、この語族を網羅的に解説したも

のは存在しなかった。1990年代に中国で相次いで刊行された《藏緬語音与詞匯》(《藏緬語音与詞匯》編写組編, 1991年) や《藏緬語族語言詞匯》(黄布凡編, 1992年) といった中国国内のチベット=ビルマ系言語の対照語彙表も、北京大学から出版された《漢藏語概論(上・下)》(馬学良主編, 1991年) や《藏緬語十五種》(戴慶厦他, 北京燕山出版社, 1991年) など、中国境外の諸言語は扱われていなかったからである。(因みに、戴慶厦主編《二十一世紀的中国少数民族語言研究》書海出版社, 1998年は中国国内の少数民族語研究の背景を知るのに有益である。近年、《漢藏語同源詞研究》(丁邦新・孫宏開主編, 南寧: 広西民族出版社, (一) 漢藏語研究的歴史回顧, 2000年, (二) 漢藏, 苗瑤同源詞專題研究, 2001年, (三) 漢藏語研究的方法論探索, 2004年, (四) 上古漢語同台関係研究, 2011年) や《漢藏語同源詞研究》呉安其, 北京: 民族大学出版社, 2002年等が出版されたことは喜ばしい限りである。) 21世紀を迎えて、前世紀の記述的・歴史的研究を総括するかの如く、漢語派・チベット=ビルマ語派双方の情報をふんだんに掲載した、シナ=チベット語族の専書が立て続けに三冊出版された。第一にベルン大学(出版当時はライデン大学)の George van Driem の手になるヒマラヤ諸語の大部の著作 (*Languages of Himalayas. vol 1・2*, Leiden, Boston and Köln Brill, 2001年), 第二に James A. Matisoff によるチベット=ビルマ祖語に関する労作 (*Handbook of Proto-Tibeto-Burman*, Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press, 2003年) である。前者は、印欧比較言語

学を修めた文献にもフィールドにも強い筆者による、数百年にわたるこの分野の研究の概観と最前線を手際よくまとめたものであるが、2巻で1300ページ余りのボリューム感ある研究書である。シナ=チベット語族は勿論のこと、印欧語族やオーストロアジア語族にも言及しているが、特に筆者の得意とするブータンやネパールの諸言語については他の追随を許さない記述となっている。参考文献として挙げられているものは、この分野の全研究を略カバーしており、後学にとってもこの上なく貴重な文献目録となっている。後者は、前世紀後半をチベット=ビルマ諸語の研究に捧げ、多くの研究者を育成してきた筆者のチベット=ビルマ祖語に関する研究の集大成であり、パークレーで継続中の STEDT (Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus Project) で収集・分析したデータを十二分に活用したものである。声母・韻尾の正確な網羅的な再構が提示されているが、声調の再構は懐疑的であるとの理由から触れられていない。最後に新進気鋭の中国語学者であるワシントン大学の Zev Handel による上古音の概説が付され、中国語研究者にとっても非常に有益なものとなっている。中国語音韻論の分野では李方桂・鄭張尚芳・潘悟雲・龔煌城等の研究、欧米では Bodman, Nicholas C. の Proto-Chinese and Sino-Tibetan: Data Towards Establishing the Nature of Relationship. (Frans van Coetsem and Linda R. Waugh eds., *Contributions to Historical Linguistics*. Leiden: E.J. Brill. pp.34-199.1980年) や William Baxter (白一平) の *A Handbook of Old Chinese Phonology*. (Berlin and New York: Mouton de Gruyter, 1992年) をはじめロシアのスタロステイン (S.A. Starostin, *Rekonstrukcija drevnekitajskoj fonologičeskoj sistemy*, 1989年), 本邦の藤堂明保・頼惟勤・橋本萬太郎・平山久雄らの研究により大いに進展していた。

シナ=チベット語族は、漢語派 (Sinitic) とチベット=ビルマ語派 (Tibeto-Burman) からなり、広域に分布するものである。かつて西田龍雄が「シナ=チベット語族と称される言語グループは、そのような包括的な名称が与えられているにも拘わらず、そこに所属する諸言語相互の言語系譜的な関係が、いまだ比較言語学的に十分に証明されていない語族である」と述べたが(「チ

ベット語・ビルマ語語彙比較における問題」『東方學』第十五輯:64-48, 1957年), この状況は現在でも当てはまり、作業仮説の域を出ていないとする者もいる。シナ=チベット諸語は族話者人口からすると印欧語族を凌ぐ最大の語族であり、中国、インド及びネパールのヒマラヤ地域、東南アジア諸国で行われており、中国、インドシナ半島、アッサム、ヒマラヤ地域に分布する数多くの言語が親族関係にあるとして与えられた名称である。それら諸言語の比較言語学的研究は不十分で、所属言語、分派関係、他の語族との関係について諸説があるが、かつて系統関係が唱えられたベトナム語・タイ諸語やミャオ・ヤオ諸語との類似は言語接触の結果であろうとされている。中国国内ではいまだ李方桂 (1937) の分類が現在なお優勢である (Languages and dialects. *The Chinese yearbook*. Shanghai: Commercial Press. 1973年に Languages and dialects of China. *Journal of Chinese Linguistics*. 1:1-14. として再録)。

この語族の諸言語は一般的に単音節語、声調言語、孤立語、分析的言語といわれるが、言語・方言または時代により構造的特徴は一様ではない。李方桂の挙げた如く、一般的な傾向として、(1) 単音節性、(2) 声調を有する傾向、(3) 声母の無声化傾向、(4) 語彙、(5) SVO の語順が挙げられる。上述の李の分類の根拠は類型論的特徴であるが、類型論が下位分類の有力な手がかりとなりえないのは定説となっている(類型論の無力さについては例えば van Driem も 'The use of typological traits as indices of genetic affiliation has consistently misled comparativists in the nineteenth and twentieth centuries.' (Sino-Bodic, *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 60.3:470) と述べている。

この語族に属する言語同士の系統関係に関してはいまだ十分には解明されていないが、研究の進展に伴う変遷もあり、研究者の解釈による相違も見られる。

3. チベット=ビルマ諸語研究史

Klaproth, Julius Heinrich von. 1823. *Asia Polyglotta*. Paris: A. Shubart. は、チベット語・ビルマ語・漢語における語彙の類似性を初めて指摘したものであり、チベット=ビルマ諸語研究

の嚆矢となった。19世紀にネパールの英国公使として赴任し自然科学者、民族学者としても名高い Brian Houghton Hodgson が 1874 年に出版した *Essays on the Languages, Literature and Religion of Nepal and Tibet*. London: Trubner and Co. にて数多くの未記述言語を記録しており、歴史的に価値の高い資料となっている。"Indonesia" という語を欧州に広めたことで有名な James Richardson Logan は 1850 年出版の "The Ethnology of the Indian Archipelago: Embracing Enquiries into the Continental Relations of the Indo-Pacific Islanders". *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia*. 4:252-347 にて「チベット=ビルマ」という名称を初めて使用した。August Conrady (1896) *Eine Indo-Chinesische Causative-Denominativ-Bildung und ihr Zusammenhang mit den Tonaccenten*. Leipzig: Otto Harrassowitz. は漢語との系統関係を示唆し、Tibeto-Burman と Sino-Siamese からなる Indo-Chinese family 説を提唱した。

"Sino-Bodic" *Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London*. 60.1: 455-488. で George van Driem は、漢語とチベット語派の漢語とチベット語の系統的近親性を重視している。つまり、シナ=チベット語族に代わる概念としてチベット=ビルマ語族があり、その下位分類としてシナ=ボディックなる概念を提唱するにいたった。この仮説は、ある意味 Simon や Bodman の考えの変異と見る事が出来るかもしれない。言語の親近性を語る際、音韻・語彙・形態統語論 (morpho-syntax) を考慮に入れねばならないが、van Driem はこれらの言語群を比較する際パラダイムの視点には注意を払っていない感がある。Benedict, Paul K. (1972), Matisoff, J. A., ed., *Sino-Tibetan: A conspectus*, Cambridge: Cambridge University Press. 同様レブチャ語に関心を払い過ぎている。更に、移民移住の歴史的観点からすると、この仮説は再考の余地が残されている。Van Driem は羌語と西夏語をチベット=ビルマ諸語の南部ブランチに分類しているが、これは戴慶厦の、プロソディーシステム (trochaic) 及びある種の語彙項目の特異な形態 (例: mi"人") 等に基づき北部ブランチと分類したのと異なっている。作業仮説としては、た

だ現在はよりチベット=ビルマ語内部のより下位のレベルの研究 (即ち言語記述) がチベット=ビルマ語の作業モデルを打ち立てるのと同様重要であると考ええる。Van Driem の仮説は van Driem, George (2001), *Languages of the Himalayas: An Ethnolinguistic Handbook of the Greater Himalayan Region*, BRILL. でその全貌を伺うことができるが、van Driem, George (2003), "Tibeto-Burman Phylogeny and Prehistory: Languages, Material Culture and Genes", in Bellwood, Peter; Renfrew, *Examining the farming/ language dispersal hypothesis*, pp. 233-249. ではより詳細な系統関係を論じている。

他にチベット=ビルマ語派の系統分類に関する論考としては、Bradley, David (1997), "Tibeto-Burman languages and classification", in David Bradley ed., *Tibeto-Burman languages of the Himalayas, Papers in South East Asian linguistics*, 14, Canberra: Pacific Linguistics, pp. 1-71., Bradley, David (2002), "The Subgrouping of Tibeto-Burman", in Beckwith, Chris; Blezer, Henk, *Medieval Tibeto-Burman languages*, BRILL, pp. 73-112., Thurgood, Graham (2003), "A subgrouping of the Sino-Tibetan languages", in Thurgood, Graham & LaPolla, Randy J., *Sino-Tibetan Languages*, London: Routledge, pp. 3-21. などがある。

4. ブータン諸語

4.1 概要

Linguistic Survey of Bhutan (van Driem 1991) の出版以前はブータン王国の諸言語についてはまとまった記述が皆無であった。現在、ブータン王国では 20 言語が分布している。Van Driem (2001) によればブータンの諸言語は以下のように分類される:

- Central Bodish : Dzongkha, Cho-ca-nga-ca-kha, Lakha, Brokpa, Tibetan, Brokkat
- East Bodish : Kheng, Bumthang, Dzala, Kurtöp, Mangdebi-kha, Chali, Black Mountain, Dakpa
- Other Tibeto-Burman Languages: Tshangla, Lhokpu, Gongduk, Lepcha
- Indo-Aryan Language: Nepali

・ Indo-Germanic Language: English

ブータン諸語の言語分布及び話者人口の一覧は以下の如くである：



ブータンの諸言語分布 (van Driem 2001 : 806より)

Dzongkha	160,000
Cho-ca-nga-ca-kha	20,000
Lakha	8,000
Brokpa	5,000
Tibetan	1,000
Brokkat	300
Kheng	40,000
Bumthang	30,000
Dzala	15,000
Kurtöp	10,000
Mangdebi-kha	10,000
Chali	1,000
Black Mountain	1,000
Dakpa	1,000
Tshangla	138,000
Gongduk	2,000
Lepcha	2,000
Nepali	156,000

ブータンの諸言語の話者人口 (van Driem 2001 : 871より)

4.2 ブータン諸語の研究者

ブータン諸語を研究している言語学者としては以下の通りである：

- ・ Boyd Michailovsky (Dzongkha, Bumthang),
- ・ Martine Mazaudon (Dzongkha, Bumthang)
- ・ George van Driem (Dzongkha, Black Mountain, Gongduk, others)
- ・ Erik Andvik (Tshangla)
- ・ Gwendlyn Hyslop (Kurtöp, Dzala)
- ・ Fuminobu Nishida (Mangde, Khengkha)
- ・ Tim Bolt (Tshangla)

4.3 主要先行研究

主要な先行研究としては以下のものがある：

- ・ Van Driem (1991; 1998; 1995a; 2001) …ブータン王国における 19 言語を同定
- ・ Van Driem (1998) …Dzongkha 文法をまとめ

た最初の著作

- ・ Mazaudon and Michailovsky (1988) …Dzongkha 声調の音響音声学的研究
- ・ Michailovsky and Mazaudon (1994) …Bumthang group の初歩的研究
- ・ Van Driem (1995) …Black Mountain Mönpa の動詞活用体系を解明したもの
- ・ Watters (1996) …Dzongkha プロソディーに関する論考
- ・ Van Driem (2004) …Lhokpu, Black Mountain, and Gongduk の記述言語学的研究
- ・ Van Driem (2007) …Dakpa and Dzala の比較言語学的研究
- ・ Hyslop, Gwendolyn (2008; 2009; 2010) …Kurtöp の諸現象の報告
- ・ Nishida (2009) …Mangebikha の初の報告
- ・ Andvik (2010) …Tshangla の詳細な文法

Van Driemは目下Black Mountain, Lhokpu, Gongdukの文法書を準備中である。

4.4 ブータン諸語の言語特徴

子音音素としては retroflex の存在が特徴的である。母音音素は 5 母音乃至は 7 母音体系である。超分節要素は、高低アクセントか声調かで研究者により解釈が異なるが、Tshangla, Lepcha 以外の諸言語には少なくとも高低アクセントが存在することが確認されている。また、2 音節語の単音節化が広くみられる。

ブータン諸語の子音音素

Manner	Labial	Dental	Retroflex	Palatal	Velar	Glottal
Stop	p, pʰ, b, (b)	t, tʰ, d, (d)	t, tʰ, d, (ɖ)	c, ch, j, (ç)	k, kh, g, (g̊)	(ʔ)
Affricate		ts, tʃ, (dz)				
Fricative	(ɸ), (f)	s, z, (z)		ʃ, ʒ, (ʒ)		h
Nasal	m	n		ɲ	ŋ	
Liquid			l, lʲ, r, (r)			
Glide	w			j		

ブータン諸語の母音組織

前舌	中舌	後舌
i, y	(u)	u
e, ø		o
ɛ	ə	ɔ ɑ

ブータン諸語の超分節要素

Language	Suprasegmental Features
Dzongkha	High/low register following sonorants and voiced Consonants. Level/falling contour on long Vowels.
Tasha-Sili	High/low register following sonorants.
Dakpa, Dzala, Mangde, Bumthap, Khengkha	High/low register following sonorants.
Olekha	High/low register following sonorants.
Tshangla	None
Lepcha	None

ブータン諸語では述語動詞が発達しているが、例えばマンデビ語では以下のように主観的発話と客観的発話で異なる述語形式を用いる：

^Ldruk=^Hpe ^Hsa^Hcha=r ^Ldzi^Hsha ^Llek^Hsha ^Lna
Bhutan=GEN land=LOC bird many COP
「ブータンには多くの鳥がいる。(主観的発話)」

^Ldruk=^Hpe ^Hsa^Hcha=r ^Ldzi^Hsha ^Llek^Hsha ^Lna=k
^Hte
Bhutan=GEN land=LOC bird many
COP=GEN COP
「ブータンには多くの鳥がいる。(客観的発話)」

その他、関係節 (relative clause), 文法関係 (grammatical relations) 及び名詞句 (noun phrase) の語順 (word order), 格標識 (casemarkers), 格の融合 (casesyncretism), 能格・与格標示 (ergative/dativemarking), 代名詞化 (pronominalization) (=verbagreement), s-接

頭辞・清濁の交替・-t接尾辞・-n接尾辞・-s接尾辞・-j接尾辞・-k接尾辞・人称標示・存在動詞の用法・使役標示・受益標示・意味論的格標示・確認性表示・再帰/中間表示等, ブータン諸語の研究の余地は大いに残されている。

ブータン諸語によくみられる現象としては, 身体尺が挙げられる。マンデビ語の身体尺に関する語彙としては以下のものがある：

- ・lagathepchu…拳骨の長さ
- ・tho…親指から人差し指の長さ
- ・choebri…肘から指の長さ
- ・labri…肩から指の長さ
- ・dzampci…胸から指の長さ
- ・sem…鼻から指の長さ
- ・dyhi…両手を広げた長さ

また, ゾンカ語では猫を表す (b) jili という語と舌を表す ce と合わせて (b) jilice というところちょうど日本語の猫舌と同じ意味になる。マンデビ語ではシンバル・レ, ツァンラ語ではダニ・リと言う現象がある。

5. おわりに

今後必要となるのは, 個別言語の詳細な記述的研究である。R.M.W.Dixon の謂う Basic Linguistic Theory に基づき, 個々の研究者が蓄積しているデータベースに集約させブータン社会への還元を帰すとともに (基礎語彙集・文法概要・民話集), マンデビ語をはじめとするブータン諸言語の新たな研究の中心的基盤として展開していくことが肝要である。将来的には, 言語保持に必要な教育環境の整備 (文字作り, 教材, 教員養成, その他) に重要な貢献となるべく研究を進めていくべく, 研究者間で連携を図る。

最後に, ブータン諸語の研究に必要な文献を挙げる：

- Andvik, Erik. 1992. *Tshangla verb morphology*. Paper presented at the 25th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics. UC Berkeley.
- . 1993. Tshangla verb inflections. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 16. 1:75-136.
- . 2003. Tshangla. *The Sino-Tibetan languages*, ed. by Graham Thurgood & Randy J. LaPolla, 439-455. London & New York: Routledge.

- . 2010. *A grammar of Tshangla*. Leiden/Boston: Brill.
- . 2012. Tshangla orthography. In *North East Indian Linguistics 4*. New Delhi: Foundation/Cambridge University Press.
- Balodis, Uldis. 2009. The numeral system of Dzala, a language of eastern Bhutan presented at the 15th Himalayan Languages Symposium, August 1, Eugene, OR.
- Bradley, David. 1997. Tibeto-Burman languages and classification. In *Tibeto-Burman languages of the Himalayas*, 1-72. Papers in Southeast Asian linguistics 14. Canberra: Pacific Linguistics.
- Busch, John M. 2007. Verbal nominalization in Kurtöp. University of Oregon. M.A. Thesis.
- Dorji, C.T. 1996. *An Introduction to Bhutanese Languages*. Thimphu. Vikas Publishing House Pvt Ltd.
- Driem, George van. 1991. *Report on the first linguistic survey of Bhutan*. Royal Government of Bhutan.
- . 1992. *The Grammar of Dzongkha*. Thimphu, Bhutan: Royal Government of Bhutan, Dzongkha Development Commission.
- . 1995a. Black Mountain verbal agreement morphology, Proto-Tibeto-Burman morphosyntax and the linguistic position of Chinese. In *New horizons in Tibeto-Burman morphosyntax*, 229-259. Osaka: National Museum of Ethnology.
- . 1995b. *Een eerste grammaticale verkenning van het Bumthang, een taal van Midden-Bhutan: met een overzicht van de talen en volkeren van Bhutan*. Leiden: Research School CNWS.
- . 1997. Sino-Bodic. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 60, no. 3: 455-488.
- . 2001a. *Languages of the Himalayas : an ethnolinguistic handbook of the greater Himalayan Region : containing an introduction to the symbiotic theory of language*. Leiden/New York: Brill.
- . 2001b. Zhangzhung and its next of kin in the Himalayas. In *New research on Zhangzhung and related Himalayan languages*, 31-44. Osaka: National Museum of Ethnology.
- . 2004. Bhutan's endangered languages programme under the Dzongkha Development Authority: Three rare gems. In *The Spider and the Piglet: Proceedings of the First International Seminar on Bhutan Studies*, ed. by Karma Ura and Sonam Kinga., 294-326. Thimphu: Centre for Bhutan Studies.
- . 2005a. Tibeto-Burman vs. Indo-Chinese. In *The Peopling of East Asia: Putting Together Archaeology, Linguistics and Genetics*, 81-106. London: Routledge.
- . 2005b. Sino-Austronesian vs. Sino-Caucasian, Sino-Bodic vs. Sino-Tibetan, and Tibeto-Burman as default theory. In *Contemporary Issues in Nepalese Linguistics*, 285-338. Kathmandu: Linguistic Society of Nepal.
- . 2007. Dakpa and Dzala form a related subgroup within East Bodish, and some related thoughts. In *Linguistics of the Himalayas and beyond*, 71-84. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Genetti, Carol. 2009. An introduction to Dzala, an East Bodish language of Bhutan presented at the 15th Himalayan Languages Symposium, August 1, Eugene, OR.
- Hyslop, Gwendolyn. 2008. Kurtöp phonology in the context of Northeast India. In *Northeast Indian Linguistics 1: papers from the first International Conference of the North East Indian Linguistic Society*, 3-25. Delhi: Cambridge University Press.
- . 2009. Kurtöp Tone: A tonogenetic case study. *Lingua* 119 (6): 827-845.
- . 2010. Kurtöp case: the pragmatic ergative and beyond. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 33 (1): 1-40.
- Hyslop, Gwendolyn, and Karma Tshering. 2010. Preliminary notes on Dakpa (Tawang Monpa). In *North East Indian Linguistics 2*. New Delhi: Cambridge University Press/Foundation.
- Imaeda, Yoshiro. 1990. *Manual of Spoken Dzongkha in Roman Transcription*. Thimphu: Japan Overseas Cooperation Volunteers, Bhutan Coordinator Office.
- 今枝由郎. 2006. 『ゾンカ語口語教本』東京: 大学書林.
- 糸永正之. 1997. 「ブータン」(特集 アジアの言語事情 -- 公用語・少数民族語・言語政策・言語教育) 『言語』26(11) 66-69.
- 陸紹尊. 1986. 《錯那門巴語簡志》北京: 民族出版社.
- . 2002. 《門巴語方言研究》北京: 民族出版社.
- Matisoff, James. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-*

- Burman: system and philosophy of Sino-Tibetan reconstruction*. Berkeley: University of California Press.
- Mazaudon, Martine. 1985. "Dzongkha Number Systems." S. Ratanakul, D. Thomas & S. Premsirat (eds.). *Southeast Asian Linguistic Studies presented to André-G. Haudricourt*. 124-57. Bangkok: Mahidol University.
- Mazaudon, Martine & Boyd Michailovsky. 1986. "Syllabicity and suprasegmentals: the Dzongkha monosyllabic noun." Paper presented at the nineteenth International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics. Ohio State University.
- . 1988. "Lost syllables and tone contour in Dzongkha (Bhutan)." David Bradley, Eugénie J.A. Henderson & Martine Mazaudon (eds.). *Prosodic analysis and Asian linguistics: to honour R.K. Sprigg*. 115-36. Canberra: Australian National University.
- Michailovsky, Boyd. 1989. "Notes on Dzongkha orthography." David Bradley, Eugénie J.A. Henderson & Martine Mazaudon (eds.). *Prosodic analysis and Asian linguistics: to honour R.K. Sprigg*. 297-301. Canberra: Australian National University.
- . 1994. Linguistic situation of Bhutan. *The Encyclopedia of Language and Linguistics* 1, London: Pergamon Press, p.339-340.
- Michailovsky, Boyd, and Martine Mazaudon. 1994. Preliminary notes on languages of the Bumthang groups. *Tibetan Studies. Proceedings of the 6th Seminar of the International Association for Tibetan Studies (Fagernes, 1992)* In P. Kvaerne (ed.), Oslo: The Institute for Comparative Research in Human Culture. p. 545-5570
- 長野泰彦. 1986. 「ゾンカ語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典』 vol.2. pp.524-525. 東京:三省堂.
- Namgay Thinley. 2008. Dzongkha Nominalization. M.A. thesis. Melbourne: La Trobe University.
- Namgyel, Singye. 2003. *The language web of Bhutan*. 1st ed. Thimphu: KMT Publisher.
- 西義郎. 1987. 「現代チベット語方言の分類」 『国立民族学博物館研究報告』 11.4: 837-900
- Nishida, Fuminobu (西田文信). 2001a. A phonology of Dzongkha. Paper presented at Postgraduate Research Forum on Language and Linguistics '01. City University of Hong Kong.
- . 2001b. A phonology of Dzongkha and TB tones. Paper presented at Linguistics Research Seminar. City University of Hong Kong.
- . 2004a. 「ゾンカ語ガサ方言の音韻体系」 『麗澤大学紀要』 78 卷, pp.13-30.
- . 2004b. 「書評 *Languages of the Himalayas: An Ethnolinguistic Handbook on the Greater Himalayan Region, Containing an Introduction to the Symbolic Theory of Language (Handbook of Oriental Studies. Section 2 South Asia, 10)* by George van Driem. Leiden: Brill Publishers, 2001」 『麗澤大学紀要』 79, pp.267-276.
- . 2008a. 「マンデビ語の概要」 チベット=ビルマ諸語研究会発表論文, 京都大学.
- . 2008b. 「ブータン王国の言語政策—現状と課題—」 日本言語政策学会第10回大会発表論文, 奈良教育大学.
- . 2009. 「マンデビ語初期調査報告」 『人文研究』 38 卷, pp.66-73. 千葉大学.
- . 2010a. 「マンデビ語の文の下位分類」 「チベット=ビルマ系言語から見た文法現象の再構築 2: 文の特徴付けと下位分類」 プロジェクト研究会発表論文, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- . 2010b. The Mangdebi language in Bhutan. *Papers in Old Chinese and Sino-Tibetan*. pp.21-26. Aoyamagakuin University.
- . 2010c. The Mangdebi language in Bhutan. The 16th Himalayan Languages Symposium 発表論文, The School of Oriental and African Studies, University of London.
- . 2011a. Pitch and Tone in some Bhutanese languages. *Tone, Accent and Intonation in Eastern Eurasian Languages*. pp.29-36. Aoyamagakuin University.
- . 2011b. The Mangde Orthography. The 17th Himalayan Language Symposium 発表論文, Kobe City University of Foreign Studies.
- . 2011c. 「ブータンをフィールドワークする」 フィールド言語学カフェ発表論文, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- . 2012a. The Mangde language in Bhutan. 『秋田大学教養基礎教育』 14 卷.
- . 2012b. 「ブータン王国の East Bodish 諸語の系統と分類について」 日本南アジア学会第25回全

- 国大会発表論文, 東京外国語大学.
- . 2013a. 『旅の指差し会話帳 ブータン』東京: 情報センター出版局.
- . 2013b. 「マンデビ語の文の下位分類」『チベット=ビルマ系言語の文法現象 2: 文の下位分類』澤田英夫(編). 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 西田龍雄. 1983. 「チベット語の歴史と方言研究の問題」『チベット文化の総合的研究』pp.3-20. 京都大学.
- . 1989a. 「ツァンロ・モンパ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大辞典』vol.2. pp. 1017-1027 東京: 三省堂.
- . 1989b. 「ツォナー・モンパ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大事典』vol.2. pp. 1046-1052 東京: 三省堂.
- Nishida, Tatsuo. 1989c. On the mTsho-sna Monpa Language in China. In *Prosodic analysis and Asian linguistics: to honour R.K. Sprigg*, edited by David Bradley et al., 223-236 Pacific Linguistics, C-104, Canberra: ANU.
- 野村亨. 2000. 「ブータン王国における言語の状況: その歴史と現状」『ヒマラヤ学誌』第7号, 京都大学ヒマラヤ研究会.
- Plaisier, Heleen. 2007. *A grammar of Lepcha*. Leiden: Boston: Brill.
- Shafer, Robert. 1954. The linguistic position of Dwags. *Oriens, Zeitschrift der Internationalen Gesellschaft für Orientforschung* 7: 348-356.
- 孫宏開・陸紹尊・張濟川・歐陽覺亜. 1980. 《門巴, 珞巴, 僜人的語言》北京: 中国社会科学出版社.
- 諏訪哲郎. 1981. 「基礎的語彙から見たブータンの諸言語」『学習院大学文学部研究年報』28. pp.187-257.
- . 1982. 「東ヒマラヤのモンパ族の文化語彙に見られるチベット語からの借用: モンパ族の基層文化への接近の試み」『学習院大学文学部研究年報』29. pp.99-140.
- Watters, Stephen Andrew. 1996. *A preliminary study of prosody in Dzongkha*. Arlington: University Texas at Arlington, M.A. Thesis.
- 張濟川. 1986. 《倉洛門巴語簡志》北京: 民族出版社.
- 【本稿は2012年5月13日, 第2回ブータン研究会(於JICA 地球ひろば)にて発表した同名論文に基づいている。当日コメントを下さった参加者の方々に記して感謝申し上げます。】